



市街地鳥瞰（下川町）

# 道経連会報 No.248

## CONTENTS

巻頭言	1
北海道新幹線開業1周年特集	2
道経連講演会	4
常任理事会レポート	10
経済施策説明	11
女性応援企業表彰	18
がんばる女性を応援する企業	19
会員企業紹介	22
会員の異動	24
道経連カレンダー	24
新会員企業紹介	25
グループ活動報告	26
人事・労務相談日	35
北海道の経済動向	36
事務局人事	45
Face to Face	45
水曜日はALL北海道ノー残業デー	46
まち探訪（シリーズ18）	47
シーニックバイウェイ北海道	50



北海道経済連合会 常任理事

**松嶋 一重**

株式会社日本政策投資銀行  
北海道支店長

## 危難の秋(とき)に

「溺れる者はワラをもつかむという。しかし、ワラをつかんだところで、どうなりもしない。

人が最後の崖に立ったとき、他に助けを求め、奇蹟を求める時は、必ず滅びる時である。自分の全てを尽くすことだけが奇蹟を生みうるのだ。もしそれを奇蹟とよびうるならば。」

坂口安吾の『信長』（旺文社文庫版）において、戦（いくさ）の前に若き織田信長が心のうちを語る場面である。

いったいこの『信長』という小説は、濃姫を娶ってから桶狭間までの、信長の青春時代に限定しているという点で、「信長もの」の中では相当変わった作品である。しかし、時代を限定したからこそ、心を揺さぶる荒々しさと、突き抜けた清清しさという点で、他の作品とは異なる味わいがある。

私事だが、この『信長』と出会ったのは、父と中学生の私と小学生の弟と、男三人暮らしをしていた頃だった。貧しい生活から抜け出そうと日々もがいていた私は、安吾の信長に、強く勇気づけられた。

『信長』には、こんな言葉もある。

「ケンカには腕力のほかにあらゆる奇策、あらゆるずるさが必要だ。しかし、ギリギリのときには奇策もずるさも有り得ない。奇策やずるさは平時の用意であって、いざ決戦の場に於いては平時の訓練を全的に投入する以外に奇策も奇蹟も待望し得ないのである。」

若き信長は、父・織田信秀や義父・斉藤道三の死によって、同族に骨肉の争いが生ずることを予測していたに違いない。また、機が熟せば、海道一の弓取りと言われた今川義元が、尾張を蹂躪して京に進軍することも必然だと考えていただろう。だから信長は、来るべき危難を乗り越えるために、奇策やずるさを発揮し、平時の訓練も怠らなかつた。そしていざ決戦となれば「平時の訓練を全的に投入する」ことに集中する。

そこで現代の日本、北海道のことである。

少子高齢化と人口減少は、確実に進行している。こうした社会の到来はずいぶんと前か

ら必然であった。にもかかわらず、準備は万全では無かったようだ。経済危機や災害など予期せぬ事態が、対策を遅らせたこともある。だが悔恨をいかに重ねたところで時計の針は逆には回らない。

とりわけ地方において、危機は深刻である。この時点において、ワラをつかもうとしたり、奇蹟を求めても、状況は何も変わらない。信長流に言えば、全力で危機に立ち向かうほかに、残された途はない。

それでは具体的に何をすべきなのか。思うにそれは、当たり前のことを徹底して実行し続けることではないだろうか。課題を認識したならば、放置しない。会議を開いたら、意見をたたかわせて結論を出す。対策を講じたら、その効果を見極めて次の一手を繰り出す。つまりガバナンスであり、PDCAサイクルであって、変わったことは何一つない。当たり前のことを全力で徹底するのみであろう。

最後に一つ付け加えるとすれば、地域社会の危機に対しては、様々な利害を超えた絆(きずな)が最大の強みになるのではないか。若き信長も、決して孤立していたわけではない。うつけ者と嘲笑された時代から、苦楽を共にした仲間がいたのである。